

初期ビザンティンにおける「祈り」

益田 朋幸

本発表で扱うのは初期ビザンティン時代、すなわち5～7世紀のキリスト教化された地中海世界である¹。論者によって、初期ビザンティン、後期古代（古代末期）、後期ローマと用語は変わるが、本稿ではもっぱらギリシア語文化圏である東地中海世界を扱うこととする。聖堂に対する奉納物や巡礼土産の銘文に現れる「祈り εὐχή」の語の分析を行う。

「祈り εὐχή」の語は、奉納銘文としてもっとも頻繁に用いられるものであった。就中以下の匿名銘は、希語羅語問わず、広く見出される。

Ἐπὲρ εὐχῆς οὗ τὸ ὄνομα ὁ θεὸς οἶδεν.

Cuius Nomen Deus Scit.

神その名を知る者の祈り（のために／の証に）

これは元来「天国における新たな名は、神のみが知る」という意味であったものが、キリスト教的謙讓を示す匿名銘に変化したとされる。

Ἐπὲρ に始まる奉納銘には、εὐχῆς 以外にも様々な語が続く。

Ἐπὲρ εὐχῆς Σεργίου.

セルギオスの祈りのために

Ἐπὲρ εὐχῆς καὶ σωτηρίας Ἰωάννου.

ヨアンニスの祈りと救いのために

Ἐπὲρ ἀναπαύσεως Ἡλιοδώρου.

イリオドロスの（魂の）憩いのために

Ἐπὲρ μνήμης Θέκλας.

テクラの思い出のために

Ἐπὲρ κοιμήσεως γονέων.

両親の眠りのために

Ἐπὲρ εἰρήνης καὶ ἀναπαύσεως Ἀναστασίας.

アナスタシアの平和と魂の憩いのために

Ἐπὲρ ὑγείας Πηγασίου.

ピガシオスの健康のために

¹ 本発表と同趣旨は以下の拙稿に詳述されているので、参照されたい。「ビザンティン初期における『祈り』の概念」『オリエント』38-1（1995年9月）。

Ἐπὲρ ἁμαρτιῶν ἀφέσεως Δομετίου.

ドメテオスの罪の赦免のために

Ἐπὲρ ἁμαρτιῶν τῶν ἱλασμοῦ μου.

我が罪の贖いのために

Ἐπὲρ σωτηρίας καὶ μακροημερεύσεως τῶν δεσποτῶν.

主人たちの救いと長寿のために

これらにおいて、銘文中で「祈り」と等価に用いられている、救済・(魂の) 憩い・追憶・眠り・(魂の) 平和・健康・罪の赦免・罪の贖い・長寿等の語は、いずれも具体的な祈願の内容を示すが、それに比べて「祈り」の語の指示するところは曖昧である。我が国における「心願成就」にも似ているであろうか。祈願の内容は神が知っている、という信頼を前提とするのであろう。

こうした用法と並行して、古典古代以来の、「祈り」の語が奉納物そのものを示す用例も認められる。

Ἐπὲρ μνήμης καὶ ἀναπαύσεως Παπύλου καὶ τῶν τέκνων αὐτοῦ τὴν εὐχὴν ἀπέδωκεν.

パピロスと息子たちの思い出と魂の憩いのために、祈りをなした(奉納物=聖堂を完成させた)。

Εὐξάμενοι τὴν εὐχὴν ἐπλήροσαν.

祈った者たちが、祈り=奉納物を完成させた。

Στέφανος πρεσβύτερος εὐξάμενος τὴν εὐχὴν ἀπέδοκεν.

司祭ステファノスが祈りをこめて、祈り=奉納物をつくった。

「祈り」をこめて奉納する捧げものそのものが「祈り」であった、ということになる。この点に関して興味深いのは、「祝福」 εὐλογία (原意は「喜ばしい言葉」) の用法である。この語は、聖地巡礼土産の上にしばしば見出される。巡礼土産は銀製、テラコッタ製の小フラスコ (アンブラ) で、聖地に由来する聖水や聖油を容れて持ち帰るものである。

Εὐλογία Κυρίου τῶν ἁγίων τόπων.

聖地の、主の祝福

Εὐλογία τῆς Θεοτόκου μεθ' ἡμῶν.

我等とともにある聖母 (神の母) の祝福

Εὐλογία τοῦ ἁγίου Συμεὼν εἰς θαυμαστὸν ὄρος.

奇跡の山の聖シメオンの祝福

結論を言えば、εὐχή（祈り）と εὐλογία（祝福）は初期ビザンティン時代において対概念をなしていた。抽象的なレベルとしては、神に祈ることによって、神から祝福（喜ばしい言葉）を得る。具体的な（物質的な）レベルでは、神に奉納物を捧げることによって、奇跡の力をもつ聖油・聖水を授かる。近代的な思惟においては別個に記述される二つの事柄が、当時にあってはギリシア語の多義性の中で、「εὐχή を捧げて εὐλογία を得る」という形で人々に意識されていたのである。

